

日本語・日本事情教育部門

1. 日本語研修コース及び日本語研修特別コース
2. 短期留学プログラム日本語コース
3. 全学向け日本語コース
4. 共通教育科目・日本語日本事情科目

1. 日本語研修コース及び日本語研修特別コース

《全体概要》

2009年度、日本語研修コースでは、本学の大学院に進学する教員研修留学生3名と研究留学生1名を受け入れた。本コースの目的は、日本で生活する上で必要な日本語力及び研究を行う上で必要な基礎的な日本語を習得することである。文型・文法10コマ（1コマ：90分）を基本として、会話、漢字、作文、情報処理、文化、修了発表指導の各技能クラスがある。コース修了時の修了発表会では、各学生がスライドを用いて日本語によるスピーチを行う。修了発表における各受講者のスピーチのテーマは以下の通りである。

<9期 2009年度後期>

マダガスカルと私の仕事について	ハリズ・ディアス・ファニバナ（マダガスカル）
私の仕事	カイン・プイン・リン・アウン（ミャンマー）
私の仕事	イングリッド・ベルスカ・ピコン・ゴメス（ペルー）
私の仕事：Radiopharmacy（放射性医薬）の研究	アロンソ・マルティネス・ルイス・ミシェル（キューバ）

《時間割表》

	月	火	水	木	金
1	日本語 (文型・文法)	日本語 (文型・文法)	日本語 (文型・文法)	日本語 (文型・文法)	日本語 (文型・文法)
2	日本語 (文型・文法)	日本語 (文型・文法)	日本語 (文型・文法)	日本語 (文型・文法)	日本語 (文型・文法)
3	日本語 (情報処理)	日本語 (作文)	日本語 (漢字)	日本語 (会話)	日本語 (修了発表指導)
4			日本語 (文化)		

以下に、各クラスの概要をまとめる。なお、2009年度、日本語研修特別コースは開講されなかった。

《日本語（文型・文法）》

【受講者】4名（非漢字系4名） 【授業時間】10コマ/週 総コマ数：124コマ

【担当教員】桑原陽子（コーディネータ）、澤崎幸江、敷田紀子

1) 目標

留学生生活を送る上で必要な基礎的な日本語を習得する。（『みんなの日本語初級』第1～25課）

2) 方法

(1) 授業の進め方

- ・ 今年度から、1限目のみ、全学日本語コース「日本語Ⅰ」と合同であった。数名の研修コースの学生だけで授業を行うと、活発な活動ができないことなどが問題視されていたからである。
- ・ 1限で『みんなの日本語初級』の学習を行い、2限では1限の学習項目の定着を図った。原則として2日（4コマ）で、1課を終了した。1限の学習内容については、全学日本語コース「日本語Ⅰ」を参照されたい。
- ・ 2限目では、語彙クイズ、文型作文を継続して行い、書くことを中心にした練習を行った。

(2) 成績・評価

中間テスト（15%）と期末テスト（85%）で、最終成績 60 点以上を合格とする。合格者は、来期、全学日本語コース日本語Ⅱを、不合格の者は、同コース日本語Ⅰを受講する。

3) 評価と課題

- ・ 全学日本語コースとの合同授業によって、多様な学習者がクラスに存在し、活発な活動ができた。
- ・ 書く活動を積極的に取り入れたので、文型定着に効果が見られた。一方、話す練習が手薄であった。来年度はロールプレイなどの話す練習を取り入れたい。
- ・ 例年、研修コースは「みんなの日本語初級」の30課程程度まで学習したが、全学日本語コースと合同になり、25課で学習を終了することになった。そのため、作文との連携の再検討が必要である。（桑原陽子）

《日本語（情報処理）》

【受講者】 4名 【授業時間】 1コマ/週 総コマ数：13コマ 【担当教員】 桑原陽子

1) 目標

Microsoft word と power point の基本的な使い方を学び、修了発表の資料を作成する。

2) 方法

情報処理センターの端末を使用し、Microsoft word と power point の使い方を学習した。教材は、担当教員作成のプリントである。修了発表資料を評価対象とした。

3) 評価と課題

I Tリテラシーの差が年々大きくなっている。効率のよい個別学習のため、教材整備が必要である。（桑原陽子）

《日本語（漢字）》

【受講者】 4名（非漢字圏4名） 【授業時間】 1コマ/週 総コマ数：14コマ

【担当教員】 山中和樹

1) 目標

教科書『みんなの日本語初級Ⅰ 漢字 英語版』を使用して、漢字の読み方、書き方を学ぶ。教科書ユニット1～11の122漢字、181漢字語を習得する。

2) 方法

(1) 授業の進め方

- ・ 原則として1コマ1ユニットで進んだ。ただし、最初の1コマ(1週目)で、ひらがなとカタカナの定着度を図り、2コマ目から漢字の紹介、成り立ちから学習を始めた。3コマめから10~14字ずつ漢字を学習した。
- ・ 授業では、漢字の成り立ちから説明し、テキストの漢字の読み・書き練習を行ったが、画数の多い漢字はもっぱら読みの練習を行った。
- ・ カードを使用し、学習済みの漢字の読みを繰り返し復習した。
- ・ 毎回、当該ユニットの復習クイズを実施した。最初の2回は絵と漢字と意味〔英語〕をつなぎ合わせる問題を出題した。それ以降は主に漢字の読みをひらがなで書く問題を出題したが、数及び4画以下の漢字の書き問題も出題した。

(2) 成績・評価

- ・ 毎回のクイズ(20%)＋期末テスト(80%)をもとに総合的に評価した。

3) 評価と課題

- ・ 参加学生4名はすべて非漢字圏であったが、興味を持ち、積極的に漢字学習に取り組んだ。
- ・ スペイン語系の学生は、「し」と「ち」の表記ミスがままあった。これはスペイン語には「し」の音がないことが原因と思われる。
- ・ 全員に共通する間違いとして、長音と短音の表記ミスも目に付いた。これは、漢字習得というより、拍感覚の未定着が原因と思われる。(山中和樹)

《日本語(作文)》

【受講者】4名(非漢字圏4名) 【授業時間】1コマ/週 総コマ数:13コマ

【担当教員】今尾ゆき子

1) 教科書および授業の目標

- ・ ハンドアウト(単文作成問題、モデル文、関連語彙等)
- ・ 5つの課題を設定し、課題作文をもとに修了発表レポートを作成する。

2) 方法

(1) 授業の進め方

- ・ 授業の始めに修了発表のテーマを大まかに決め(「私の仕事」、「私の専門」など)、課題作文の集大成が修了発表および修了レポート作成の基盤となるように、5つの課題を設定した。
- ・ Q&A方式の単文作成とモデル文を参考に文章作成の練習を行い、課題作文はワープロ打ちで宿題とした。
- ・ 短文作成は授業中に添削、課題作文はメールで添削。
- ・ 第9回目(冬休み前)までに5つの課題作文をまとめて修了レポートを作成し、1月から個別指導。
- ・ 課題作文 1. 自己紹介/2. わたしのまいにち/3. わたしの学校

4. わたしのしごと／5. わたしの国・わたしの町

(2) 成績・評価

課題作文(50%)＋修了レポート(50%)

3) 評価と課題

- ・ 出席は4名のうち3名が皆出席。授業態度も良好。他の1名は、12月初旬に家庭の事情により一時帰国したため、作文指導が不十分となった。
- ・ 文型・文法クラスが全学向けコースの日本語Ⅰと合同授業となり、授業スケジュールが変更された(初級Ⅰ:25課終了)。これにより、文法項目の導入が前年度より遅くなったため、既習文法や語彙を用いた文章作成に影響が出た。
- ・ 文章作成にあたり、学生は既習漢字をほとんど使用しなかった。
- ・ 文章作成は文型・文法、語彙(漢字)項目の集大成であり、各科目の習得状況に関して密接な情報交換と連携が望まれる。(今尾ゆき子)

《日本語(会話)》

【受講者】4名(非漢字圏4名) 【授業時間】1コマ/週 総コマ数:13コマ

【担当教員】中島清

1) 目標

指導教員等との意思疎通を行うために必要な会話力、また、地域社会での生活・交流に必要な会話力を習得させることを目標とする。そのため、「みんなの日本語」の語彙・表現範囲に拘らず、必要とされる語彙表現を柔軟に提示する。

2) 授業方法

① 作文用テーマを15題提示し、毎週1テーマずつ作文を宿題として課す。② 授業では毎回、全員が作文に基づき日本語で発表を行い、その発表内容に関して、他の学生が質問しながら、会話を展開させる。作文は添削して返却する③その後、「みんなの日本語」各課5問の即答練習を行う。④最後に、日本の歌を紹介するか、又は「新日本語の基礎」の復習ビデオを使って、より自然な会話を学ぶ。

3) 成績・評価

- ・ 成績評価割合 期末テスト 100%(即答問題 50%、テーマ発表 50%) 出席率 25% 作文提出率 25%
- ・ 期末テスト内容
 - ① 即答問題: 質問文 20 問を予めテープに録音しておく。各問解答時間は約 10 秒。録音済テープを流し、別のテープレコーダーでQAともに収録・採点する。
 - ② テーマ発表: 学期期間中に発表した 12 のテーマの内、各 2 テーマが記載してある 6 枚のカードを用意し、その中から抽選で 1 枚選んでもらい、カードに書いてある 2 つのテーマから 1 題を選び、そのテーマについて 1 分考えた後 3 分発表、2 分質疑応答をして評価する。

4) 評価・課題

- ・ 留学生センターの教室は狭く、窮屈な雰囲気が否めないのも、より開放的な雰囲気では話ができるよう、ラウンドテーブルがあり、かつ広々としたラウンジを教室として使ったが、それはよかった。
- ・ 昨年度に比べて、会話における話題の範囲が狭く、会話を展開させるのにやや苦勞した。
- ・ 昨年度の2名にくらべて、4名に増えたクラスであったが、やはり、費用対効果の点から、もったいない気がする。

《日本語（文化）》

【受講者】 4名 【授業時間】 1コマ/週 13コマ

【担当教員】 膽吹覚（コーディネータ）、廣谷幸子（華道）、勝木禮子（書道）、柳原智子（陶芸）

1) 目標

華道、書道、陶芸について、福井県在住の指導者から直接に指導を受けて体験学習することによって、日本の伝統文化に対する理解を深める。

2) 授業内容

(ア) 華道（池坊福井中央支部）：6コマ

第1回は華道とその中の池坊について概説し、道具の使い方を説明したうえで、花に親しむことを目的として自由花に取り組んだ。第2回は秋の花をテーマに、自由花を生けた。第3回はクリスマス为主题に自由花を生けた。第4回は正月の花というテーマで、生花正風体に取り組んだ。第5回は春の花というテーマで生花新風体を学んだ。第6回は修了発表会会場に各自が自由花を生けて、このクラスでの学習成果を発表した。いずれの回も出来上がった作品をセンター1階に展示し、また、終わった作品（花）は使えるものとそうでないものとに分類し、花を慈しむ心を大切にすることを指導した。

(イ) 書道（若越書道会）：3コマ

第1回は授業のはじめに筆の持ち方や運び方などの基本を指導し、その後、各自の名前をひらがなで書く練習をした。第2回はカタカナを書く練習をした。第3回は書初めをした。事前に受講生が漢字1字を選定し、それを色紙に書いた。

(ウ) 陶芸（越前焼）：4コマ

第1回と第2回は陶芸の道具の使い方など、陶芸の基礎を学んだ上で、中皿と湯飲み茶碗を製作した。第3回と第4回は、前回の授業を受けて、花器と茶碗を制作した。

3) 評価と課題

成績は出席状況と各講師からのご意見を総合してコーディネーターが判定した。受講生はおおむね意欲的に取り組んでいたようである。今期から新たに陶芸（越前焼）を導入した。講師との事前協議では陶芸特有の手の感覚をどのように指導するかが心配されたが、実際に授業を行なってみると、おおむね理解されているようであった。今後はもう一歩進めて、陶芸の中の越前焼の特色にまで触れてみたい。

（膽吹覚）

《コース全体についての課題》

全学日本語コースとの合同授業が今期の大きな変更点である。これにより、話題が広がり活発な活動が可能になったことが大きな利点である。また、学習者間の習得状況の差が目立たなくなり、クラス活動の停滞がそれほど起こらなかった。本コースは、これまでも学習者間の日本語力の差が問題になり、習得が困難な学習者をどのようにサポートするかが課題であった。今期は、これまでの事例に基づき、学習が困難な学習者に対して、早い時期から対応できたように思う。

(桑原陽子)

2. 短期留学プログラム日本語コース

《概要》

このコースは、福井大学と交流協定を締結している大学等から受け入れている短期留学プログラムAコースの学生が共通科目として受講する日本語コースで、日本語・日本事情10単位、伝統産業2単位が必修である。2008年度からは日本語・日本事情科目を7科目増設して中・上級レベルの学生にも対応できるようなプログラムとなっている。

2009年前期は、日本語科目7科目（「日本語初中級A」「日本語初中級B」「日本語中級（日本語A）／（日本語C）」「日本語上級（日本語E）／（日本語G）」、「はじめての漢字」「はじめての作文」「はじめての会話」）および日本事情科目4科目（「日本事情2」「日本の文化」「応用日本語2」「多文化コミュニケーション2」）を開講し、2008年度受け入れの学生18名が受講した。

2009年後期は、中国、韓国、インドネシア、フランス、アメリカ、ドイツの6カ国からの留学生20名が本コースに参加し、「日本語初級1」「日本語初級2」「日本語初中級」「日本語中級（日本語B）／（日本語D）」「日本事情1」「多文化コミュニケーション1」「応用日本語1」「伝統産業1」を受講した。

① 2009年前期

《科目一覧》

科目	教員	教科書	受講者
日本語初中級A	膽吹覚 村上洋子	『みんなの日本語初級Ⅱ』	6名
日本語初中級B	桑原陽子 市村葉子	『みんなの日本語初級Ⅱ』	6名
日本語中級（日本語A）	桑原陽子	『中・上級者用日本語テキスト 大学で学ぶための日本語ライティング』	1名
日本語中級（日本語C）	山中和樹	プリント	1名
日本語上級（日本語E）	膽吹覚	『なめらか日本語会話』	2名
日本語上級（日本語G）	今尾ゆき子	『日本語上級読解』	2名
はじめての漢字	今尾ゆき子	『みんなの日本語初級Ⅰ 漢字 英語版』	5名
はじめての作文	山中和樹	『みんなの日本語初級やさしい作文』	5名
はじめての会話	山中和樹	『みんなの日本語初級Ⅱ』	9名
日本事情2	膽吹覚	なし	3名
日本の文化	膽吹覚	なし	4名
応用日本語2	山中和樹	プリント	2名

科目	教 員	教 科 書	受講者
多文化コミュニケーション2	山中和樹	プリント	0名
伝統産業2	中島清	プリント	0名

《時間割》

	月曜日	火曜日	水曜日	木曜日	金曜日
1限		日本事情2		日本の文化	
				多文化コミュニケーション2	
2限	日本語初中級A	日本語初中級A	日本語初中級A	日本語初中級A	
	応用日本語2				
3限		はじめての漢字	はじめての作文	はじめての会話	伝統産業2
		日本語中級(A)			
		日本語上級(E)			
4限	日本語初中級B	日本語初中級B	日本語初中級B	日本語初中級B	
		日本語中級(C)			
		日本語上級(G)			

《受講者数》

科目	国名	中	韓	タ	ポ	シ	ド	合
	国	国	イ	ラ	リ	イ	計	
日本語初中級A		5	0	0	1	0	0	6
日本語初中級B		3	2	1	0	0	0	6
日本語中級（日本語A／日本語C）		1	0	0	0	0	0	1
日本語上級（日本語E／日本語G）		0	0	0	0	0	2	2
はじめての漢字		0	2	1	0	1	1	5
はじめての作文		4	1	0	0	0	0	5
はじめての会話		7	0	1	0	1	0	9

科目	国名							合 計
	中 国	韓 国	タ イ	ポ ー ラ ン ド	シ リ ア	ド イ ツ		
日本事情 2	1	0	0	0	0	2	3	
日本の文化	2	0	0	0	0	2	4	
多文化コミュニケーション 2	0	0	0	0	0	0	0	
応用日本語 2	0	0	0	0	0	2	2	
伝統産業 2	0	0	0	0	0	0	0	
小計	23	5	3	1	2	9	43	

《授業報告》

1. 日本語初中級 A

- ・ 受講者：6名（中国5名、ポーランド1名）
- ・ 授業時間：4コマ/週 総コマ数：56コマ
- ・ 担当教員：* 膽吹覚、村上洋子（*コーディネーター）

1) 教科書及び授業の目標

- ・ 『みんなの日本語初級Ⅱ』（スリーエーネットワーク）
『みんなの日本語初級Ⅱ文法解説』（スリーエーネットワーク）
- ・ 初中級の日本語の文法、語彙を学び、応用練習をする。
- ・ 日本の社会生活、日常生活を理解し、コミュニケーションができるようになる。

2) 方法

(1) 授業方法

- ・ 週4コマの中の3コマで文型・語彙の導入を行い、残りの1コマでその定着を図った。凡そ3コマで2課のペースで進めた。ただし、このクラスのほぼ全員が「はじめての会話」と「はじめての作文」を履修しており、そのクラスで会話と作文をするために、この授業では会話は割愛した。その一方で、週1回2人ずつ3分間スピーチを担当させて、日本語の運用能力の向上を図った。

(2) 小テスト

- ・ 26-30、31-35、36-40、41-45の4回実施した。

(2) 成績および評価

- ・ 3分の2以上の出席を前程として、期末試験（80%）とクイズ（20%）の結果をもとに授業態度などを考慮して総合的に判断した。

3) 評価と課題

- ・ 全 50 課中 47 課までしか進めなかったが、期末試験の結果を見る限り、受講生のほぼ全員が 47 課までの文型・語彙を確かに習得したと見てよいであろう。この授業では「はじめての会話」「はじめての作文」「はじめての漢字」など、このクラスの受講生の多くが履修している科目との連携が問題になった。今後はこうした連携を深めて、日本語・日本事情系科目として受講生の日本語能力向上に寄与する方策を考える必要があるであろう。(膽吹覚)

2. 日本語初級B

- ・ 受講生：6名（漢字圏3名、非漢字圏3名 中国3、韓国2、タイ1）
- ・ 授業時間：4コマ/週 総コマ数：57コマ
- ・ 担当教員：*桑原陽子、市村葉子（*コーディネーター）

1) 目標

教科書『みんなの日本語初級Ⅱ』26課～48課を終了。初級の基本的な文法と語彙を習得し、日常生活において円滑なコミュニケーションができるようになることを目指す。

2) 方法

(1) 教科書『みんなの日本語初級』の取り扱い

- ・ 2日で1課終了。「書いて覚える文型練習帳」等の補助教材も積極的に使用した。
- ・ 各課の新出語彙から10語選択し、短作文問題を作成し、宿題とした。
- ・ 文法復習の時間を合計8回設けた。「メールの書き方」を数回取り入れ、実際のコミュニケーションのための書く練習を行った。

(2) 教科書以外の活動：スピーチ

毎日一人ずつ、自由スピーチや、直前にくじでテーマを決めるスピーチを行った。

(3) 成績評価

- ・ 文法復習テスト（筆記）3回（15%分）＋修了テスト（85%分）

3) 評価

- ・ 全員授業態度は良好であった。
- ・ 学習者の希望や進級後のことを考慮し、48課まで学習を終了した。
- ・ 「メールの書き方」は今後さらに教材を充実させたい。(桑原陽子)

3. 日本語中級（日本語A）

- ・ 受講生：1名（中国1名）
- ・ 授業時間：1コマ/週 総コマ数：15コマ
- ・ 担当教員：桑原陽子

1) 目標

レポートの書き方を学ぶ

2) 教科書

佐々木瑞枝・細井和代・藤尾喜代子著「中・上級者用日本語テキスト 大学で学ぶための日本語ライティング」The Japan Times

3) 方法

教科書に沿って、レポート執筆に必要な表現や文型を学ぶ。ほぼ毎回、練習問題やレポート執筆（2回）の課題を出した。

筆記試験（60点）と提出物・授業態度（40点）を総合的に評価した。

3) 評価

- ・ 授業態度は非常に良好で、課題レポートにもまじめに取り組んでおり、日本語力の伸びは著しかった。（桑原陽子）

4. 日本語中級（日本語C）

- ・ 受講者：1名（中国1名）
- ・ 授業時間：1コマ/週 総コマ数：14コマ
- ・ 担当教員：山中和樹

1) 教科書及び授業の目標

- ・ 教科書：プリントを配布
- ・ 擬音語・擬態語や助詞の使い分けなどに関するテーマの文章を読んで初級のまとめをし、それらを実際の作文で使用できるようにする。

2) 方法

(1) 授業方法

この科目は共通教育科目「日本語C」との合同授業である。授業は、大体、2コマに1課のペースでプリント教材を読み、語句の意味や用法の確認をおこなった。

(2) 復習クイズ

2回、中間試験として実施した。

(3) 成績及び評価

成績評価は規定の出席率（2/3以上）を満たすことを前提として、その上で中間試験と期末試験の結果をもとに判断した。内訳は次のとおり。中間試験（30%）、期末試験（70%）。

3) 評価と課題

このクラスは共通教育科目「日本語C」との合同授業であるが、短プロ生を含めた非正規生の方が日本語能力も学習意欲も上だった。短プロ生は出席・授業態度とも良好（出席率100%）だった。プリント教材は雑誌に掲載された記事を使用した。ふりがなはついていなかったが、専門用語を除くと、理解が困難な様子はなかった。（山中和樹）

5. 日本語上級（日本語E）

- ・ 受講者：2名（ドイツ2名）
- ・ 授業時間：1コマ/週 総コマ数：15コマ

- ・ 担当教員：膽吹覚
- 1) 教科書及び授業の目標
 - ・ 『なめらか日本語会話』（アルク）
 - ・ 大学での講義、日常生活などで役に立つ実際のな会話能力を養う。
- 2) 方法
 - (1) 授業方法
 - ・ 教科書に従って、1コマで2課ずつすすめた。「用例」では発音の練習を行い、それを踏まえて「練習」で応用力を養った。また、課ごとにリスニングが2問設けられているので、リスニング能力の向上も図った。
 - (2) 成績および評価
 - ・ 3分の2以上の出席を前程として、中間試験と期末試験の結果をもとに授業態度などを考慮して総合的に判断した。
- 3) 評価と課題

全体としては1冊の教科書を全課学習できたので、当初の授業の目標は凡そ達成されたと考えている。ただし、共通教育科目との合同授業（計25名）であったために、発音練習が十分にできなかったこと、教科書が会話特有の語法の基礎定着を目指すものであったので、ロールプレイなどのアクティビティーを設けることができなかったこと、工学部生と短期留学生の日本語能力の格差（短期留学生の方が高い）など、反省或は工夫を要する点もあり、今後の課題とさせていきたい。

（膽吹覚）

6. 日本語上級（日本語G）

- ・ 受講者：2名（ドイツ2名）
- ・ 授業時間：1コマ/週 総コマ数：15コマ
- ・ 担当教員：今尾ゆき子
- 1) 教科書及び授業の目標
 - ・ 教科書：柿倉侑子他『日本語上級読解』（アルク）
 - ・ 目標：さまざまなテーマの文章を読んで要約することにより、語彙力を増やすとともに読解力および文章作成力を培う。
- 2) 方法
 - ・ 1授業1課（1つの読み物）のペースで課題文を読み、単語の意味や指示語の指示内容等の確認、文章の構成と文章全体の流れの把握および内容理解の後、「内容の問題」「言葉の問題」で文章が理解できたかどうかを確認した。
 - ・ 毎回、テキストの課題文から選定した重要語句を用いた短文作成5問、要約文（160字程度）および感想・経験等の文章作成（160字程度）を宿題とし、添削の後返却した。
 - ・ 成績評価：レポート提出（50%）、期末試験（50%）
- 3) 評価と課題
 - ・ 出席・授業態度は良好。

- ・ 1級レベルの漢字圏の学生に混じって授業に一所懸命ついてきた感がある。毎週の課題もきちんと提出し、語彙力・表現力が格段に向上した。(今尾ゆき子)

7. はじめての漢字

- ・ 受講者：5名（韓国2、シリア1、タイ1、ポーランド1）
- ・ 授業時間：1コマ/週 総コマ数：15コマ
- ・ 担当教員：今尾ゆき子

1) 教科書及び授業の目標

- ・ 教科書：『みんなの日本語初級 I 漢字 英語版』
- ・ 漢字の読み方、書き方を学ぶ。教科書ユニット1～10の112漢字、170漢字語を習得。

2) 方法

(1) 漢字導入

原則として1コマ1ユニットで進んだ。最初の1コマ（1週目）で、ひらがなとカタカナの定着度を確認した後、漢字の成り立ちと基本的な筆順を導入した。2コマ目から漢字を導入し、第3コマ目からディクテーションを実施した。次回学習項目の予習プリントを配付し、授業ではテキストの練習問題を行うとともに、毎回、読み・書きクイズとディクテーションを行うことにより、漢字の定着を図った。また、適時、作文を課した。

(2) 復習クイズ

毎回、当該ユニットの復習クイズ（漢字の読みクイズと書きクイズ）とテキスト巻末のクイズを実施した。学生が提出した答案は、その場で採点して誤答を指摘し学生に修正させる方法をとった。

(3) 成績・評価

クイズ3種（10%）、中間（40%）・期末テスト（50%）とし、総合的に判断した。

3) 評価と課題

参加学生は5名全員が非漢字圏、そのうち2名は韓国の学生で既習漢字が少しあることから漢字の習得が容易であった。タイ、ポーランド、シリアの学生にとって漢字は全く異形の文字であったが、熱心に漢字学習に取り組んだ。習得状況もきわめて良好で、学習漢字以外の漢字に関する質問が毎回続出した。全員、出席・態度良好、成績も優秀。

問題点は漢字の読み（表記）で、長音表記（語中長音欠落：中学生、高校生、中国人、お母さん、お父さん 語中長音添加：去年、主人）に誤答が目立った。(今尾ゆき子)

8. はじめての作文

- ・ 受講者：5名（中国4名、韓国1名）
- ・ 授業時間：1コマ/週 総コマ数：15コマ
- ・ 担当教員：山中和樹

1) 教科書及び授業の目標

- ・ 教科書『みんなの日本語初級 やさしい作文』
- ・ 初級の語彙や文法を使って、さまざまなテーマで作文する。

2) 方法

(1) 授業方法

まず、モデル文を全員で読み、内容を把握する。語彙・文法項目で疑問があれば、質問させる。次に作文のポイントに進み、練習問題をやる。最後に、各自が作文する。授業時間内にできないときは宿題とし、次回に提出させる。

原則として、1コマ1ユニットで進んだが、最初のユニットは易しいので1コマ2ユニットで進んだ。各課はモデル文の内容解説、教科書の練習問題、「作文メモ」、「書きましょう」（実際の作文）からなっている。文法が不確かな場合は、文法解説も行った。

(2) 成績評価

課題作文提出回数と出席状況・授業態度及び期末試験より総合的に評価した。

3) 評価と課題

- ・ 出席・授業態度ともおおむね良好であった。
- ・ 学生の全員が漢字圏であり、文字の指導には時間をほとんど割かなかった。中国の簡体字と日本の新字体の違いに随時、触れるだけだった。
- ・ 助詞を中心とした文法上の誤りはいくつか目に付いたが、特に復習する必要はなく、間違いの訂正のときに指導するにとどめた。(山中和樹)

9. はじめての会話

- ・ 受講者：9名（中国7名、タイ1名、シリア1名）
- ・ 授業時間：1コマ/週 総コマ数：15コマ
- ・ 担当教員：山中和樹

1) 教科書及び授業の目標

- ・ 教科書『みんなの日本語初級Ⅱ』
- ・ 指導教員との会話、学外での会話において、自分、趣味、専門などについて話せるように表現や語彙を習得する。

2) 方法

(1) 授業方法

教科書の各課の会話のテープをまず聴き、内容を理解する。その際、教科書は見ないようにする。次に教科書を見て内容を確認する。次に、教科書を見ないで一文ずつ、テープの会話を暗唱する。それから、その課の教授項目の表現を使用して、指導教員や他の学生と自由な会話の練習をする。最後に、ビデオを見て、その課を終了する。

初めは1コマの授業で1課の進度だったが、文法クラスの進度が速くなるとともに2課行うようになった。

3) 評価と課題

- ・ 出席状況・授業態度及び期末試験（個別の会話試験）より総合的に評価した。出席・授業態度とも良好であった。出席率はほぼ100%。
- ・ このクラス所属の学生9名は文法クラスでは2つのクラスに分けられている。一方のクラスの進度が他方よりやや遅れていることもあって、遅れているクラスの進度に合わせざるを得なかった。そのため、当初予定していたよりも遅れが出た。当面、『みんなの日本語初級I』の復習項目も交えて会話練習を行った。最終的にはほぼ予定どおり、文法クラスの進度に合わせて終了することができた。
- ・ 課題としては受講者数が多かったため、一人一人の会話練習の時間が十分ではなかったことがあげられる。(山中和樹)

10. 日本事情2

- ・ 受講者：3名（ドイツ2名、中国1名）
 - ・ 授業時間：1コマ/週 総コマ数：15コマ
 - ・ 担当教員：膽吹覚
- 1) 教科書及び授業の目標
- ・ 教科書は使用しなかった。
 - ・ 福井県の各市町村に関する現状を考究することによって、現代日本事情に関する知識を醸成し、理解を深める。

2) 方法

(1) 授業方法

受講生が2人1組となって、福井県下の市町村から1つを選出し、その地域の産業・地理・歴史・観光などについて、パワーポイントを使用して、日本語でプレゼンテーション（20分）する。その後、教員並びに受講生とのディスカッションで理解を深め、その後、必要に応じて教員が補足説明を行った。

(2) 成績および評価

3分の2以上の出席を前程として、プレゼンテーションとレポートの結果をもとに授業態度などを考慮して総合的に判断した。

3) 評価と課題

今年から学生参加型の授業を試みた。学生に20分間のプレゼンテーションを課したことは大きな不安であったが、ほぼすべての学生が十分な準備をして発表に臨んだことは評価できる。ただし、発表後のディスカッションは発言が毎回、一部の学生に偏り、まったく発言しない学生もいたことは今後の課題である。また、工学部生と短期留学生の日本語能力並びに授業に望む姿勢の格差（ともに短期留学生の方が高い）がはっきりしており、クラスを分けることも考えたが、これは今後の推移を見守りたい。(膽吹覚)

11. 日本の文化

- ・ 受講者：4名（中国2名、ドイツ2名）
- ・ 授業時間：1コマ/週 総コマ数：15コマ
- ・ 担当教員：膽吹覚

1) 教科書及び授業の目標

- ・ 教科書は使用しなかった。
- ・ 日本の伝統的な遊戯について学ぶことで、その背景にある日本文化、日本人の心性について考える。

2) 方法

(1) 授業方法

- ・ 日本の伝統的遊戯—しりとり、折り紙、いろはカルタ、百人一首、将棋、囲碁、福笑いなど—について、教員がその歴史、遊び方、そこに見られる文化的特徴などをパワーポイントを使って講義したあと、受講生が実際にその遊戯を体験し、教員と学生のディスカッションを経て、最後には課題（主にその遊戯についての意見）を課し、作文を提出させた。

(2) 成績および評価

3分の2以上の出席を前程として、レポートの結果をもとに授業態度（課題）などを考慮して総合的に判断した。

3) 評価と課題

今年から学生参加型の授業を試みた。学生に実際に遊戯を体験させることで、授業への意欲を高める目論見は成功したが、その後の文化論への展開が不十分であったと思われる。また、この授業でも学部生と短期留学生の間での、日本語能力、授業への取り組み方、発言の多少、課題の解答、などすべての点で学部生が低く、短期留学生が高いという傾向が見られた。こうした傾向は他の合同クラスでも見られており、短期留学生の悪影響も考えられるので、今後はクラスの分離も視野に入れる必要があるであろう。（膽吹覚）

12. 多文化コミュニケーション2

- ・ 受講者：0名

13. 応用日本語2

- ・ 受講生：2名（ドイツ2名）
- ・ 授業時間：1コマ/週 総コマ数：14コマ
- ・ 担当教員：山中和樹

1) 教科書及び授業の目標

- ・ 教科書：日本経済新聞土曜版掲載シリーズ「仕事常識」のプリント
- ・ 日本経済新聞掲載「仕事常識」を通して、日本企業における職場マナーを学ぶ。また、それを通して、現代日本の社会文化を理解する視点を養うとともに、語彙力、理解力、表現力の

向上を図る。

2) 方法

(1) 授業方法

この科目は共通教育科目「応用日本語Ⅰ」との合同授業である。導入として、新聞記事の聴解を通して概略を把握する手法を実施した。導入後は教材の講読、内容質問等を行った。

(2) 復習クイズ

各回1つの記事を読み切った後、次回にその内容に対する試験（記述試験）を実施した。試験については実施の次週に採点返却し、模範解答を配布した。

(3) 成績及び評価

成績評価は規定の出席率（2/3以上）を満たすことを前提とし、その上で復習クイズの成績と期末試験（電話応対試験）の結果をもとに、総合的に判断した。

3) 評価と課題

このクラスは共通教育との合同クラスであるが、正規生より非正規生のほうが日本語能力も高く、授業態度もよかった。また、正規生のために、資格外活動としてのアルバイトや卒業後日本国内企業に就職するために役立つようにコースが設定されているが、非正規生にとっても、日本の企業文化、マナーを学ぶことができるメリットがある。今後は、非正規生にとってもより魅力があり、かつ正規生にとっても有用な記事を厳選していく必要がある。短プロ生の2名は出席及び授業態度も良好で、成績も満足できるものだった。（山中和樹）

14. 伝統産業2

「伝統産業」については、「伝統産業1」（秋開講）か「伝統産業2」（春開講）のどちらかを履修することになっているが、全員が「伝統産業1」を履修したため、「伝統産業2」の履修者はいなかった。（中島清）

② 2009年後期

《科目一覧》

科目	教 員	教 科 書	受講者
日本語初級1	今尾ゆき子 市村葉子	『みんなの日本語初級Ⅰ』	8
日本語初級2	山中和樹 村上洋子	『みんなの日本語初級Ⅰ』	5
日本語初中級	膽吹覚 酢谷尚子	『みんなの日本語初級Ⅱ』	4
日本語中級（日本語B）	山中和樹	『速読用の文化エピソード』	3
日本語中級（日本語D）	膽吹覚	『大学・大学院留学生の日本語①読解編』	3
日本語上級（日本語F）	桑原陽子	プリント	0
日本語上級（日本語H）	今尾ゆき子	『日本語上級読解』	0

科目	教 員	教 科 書	受講者
日本事情 1	今尾ゆき子	プリント『日本を知る』	3
多文化コミュニケーション1	山中和樹	プリント	1
応用日本語 1	山中和樹	DVD『僕の生きる道』	2
伝統産業 1	中島清	プリント	20

《時間割》

	月曜日	火曜日	水曜日	木曜日	金曜日
1 限	日本語初中級	日本語初中級	日本語初中級	日本語初中級	
	応用日本語 1			多文化コミュ 1	
2 限	日本語初級 1	日本語初級 1	日本語初級 1	日本語初級 1	
		日本事情 1			
3 限	日本語初級 2	日本語初級 2	日本語初級 2	日本語初級 2	伝統産業 1
		日本語中級 (B)			
		日本語上級 (F)			
4 限		日本語中級 (D)			
		日本語上級 (H)			

《受講者数》

科目	国名	中	韓	ア	フ	ド	イン	合
	国	国	国	メ	ラ	イ	ド	計
				メ	ラ	ツ	ネ	
				リ	ン		シ	
				カ	ス		ア	
日本語初級 1		5	2	0	0	0	1	8
日本語初級 2		2	1	0	2	0	0	5
日本語初中級		1	0	2	0	1	0	4
日本語中級 (日本語B / 日本語D)		1	0	2	0	0	0	3
日本事情 1		1	0	2	0	0	0	3
多文化コミュニケーション 1		1	0	0	0	0	0	1
応用日本語 1		0	0	2	0	0	0	2

科目	国名	中	韓	ア	フ	ド	イン	合
		国	国	メ	ラ	イ	ド	計
				リ	ン	ツ	ネ	
				カ	ス		シ	
							ア	
伝統産業 1		9	3	4	2	1	1	20
小計		20	6	12	4	2	2	46

《授業》

1. 日本語初級 1

- ・ 受講者：8名（漢字圏5名、非漢字圏3名 中国5、韓国2、インドネシア1）
- ・ 授業時間：4コマ/週 総コマ数：52コマ
- ・ 担当教員：*今尾ゆき子、市村葉子（*コーディネーター）

1) 教科書及び授業の目標

- ・ テキスト『みんなの日本語初級 I』25課終了。初級の基本的な文法と語彙を習得。
- ・ ひらがな・カタカナの導入と定着

2) 方法

(1) 授業方法

- ・ 原則として2課を4コマで行った。1課を1コマで導入。3コマ目に2課分の談話練習と運用練習を行い、4コマ目に復習、復習テスト実施。
- ・ 「会話」：復習の時間に12回（1, 2, 5, 6, 9, 13, 15, 17, 18, 19, 22, 24課）実施。
- ・ 「聴解」：各課「問題」の聴解部分はテープを貸し出して宿題。聴解練習を11回実施（「聴解タスク 25」L9～16, 19, 22, 24）。
- ・ 「文字・表記」：
 - ① 「ひらがな」、「カタカナ」を各3回導入（各コマ10分程度）。
 - ② 確認テスト；ひらがなテスト1（清音）、ひらがなテスト2（濁音・拗音・長音・撥音・促音）、カタカナテスト
 - ③ 「かな」導入後、談話練習と復習の時間に10分程度「語彙クイズとディクテーション」（5～25課）を21回実施。語彙クイズ6問、ディクテーション4問。
 - ④ 毎回1人ずつ日付、曜日、天気を板書。

(2) 復習テスト

- ・ 復習テストを6回実施。

(3) 成績および評価

- ・ 復習テスト6回（50%）と期末テスト（50%）の結果をもとに総合的に判断した。

3) 評価と課題

- ・ 授業開始前における「ひらがな」の習得状況は、8名中5名が既習、3名が未習（各70%、40%、9%）。2週間（6コマ）のかな文字導入期間で、全員「ひらがな」清音定着、3週目には濁音、拗音、特殊音もほぼ習得。しかし、文型導入には支障がなくなったものの、カタカナは学期末まで習得不完全であった。引き続き「カタカナ」の定着を図る必要があろう。
- ・ 2名の学習開始が1週間（4コマ分）遅れたため、第2週目の空き時間に特別授業を設定して本来の授業と同時進行で補習を実施した。
- ・ 出席、授業態度とも良好、成績評価は全員優良であった。（今尾ゆき子）

2. 日本語初級2

- ・ 受講生：5名（漢字圏3名、非漢字圏2名 中国2名、フランス2名、韓国1名）
- ・ 授業時間：4コマ/週 総コマ数：52コマ
- ・ 担当教員：*山中和樹、村上洋子（*コーディネーター）

1) 教科書及び授業の目標

- ・ テキスト『みんなの日本語初級I』25課終了。初級の基本的な文法と語彙を習得。
- ・ ひらがな・カタカナの導入と定着

2) 方法

(1) 授業方法

- ・ 原則として2課を3コマで行った。1コマ目、2コマ目に各課を導入し、3コマ目に2課分の談話練習、運用練習等を行った。4コマ目で2課分の会話練習と絵カードを使った語彙の定着を行った。テキストの会話の部分は4コマ目にビデオを利用して練習を行った。
- ・ 聴解問題はテープを貸し出して宿題とした。
- ・ テキストの復習A～E、練習プリント（『書いて覚える文型練習帳』他から作成）をほぼ毎回、宿題にして文法及び語彙の定着を図った。

(2) 復習テスト：5回実施（原則として5課ごとに1回）

(3) ひらがな・カタカナの導入

- ・ 第1週目の3コマで、ひらがな導入。
- ・ 第2週目の3コマでカタカナ導入。

(4) ディクテーション

- ・ ひらがな・カタカナ及び語彙の定着を図るために、ひらがな・カタカナ導入後の第3週目（5課終了後）から開始。毎週2回実施し、総回数21回。
- ・ 問題は4問。復習を兼ねて各課（5課以降）の例文から4文抜粋。さらに、絵を見て答える語彙の問題を6問程度追加。5～8分で実施。

(5) 評価

- ・ 復習テスト5回(25%)＋期末テスト(75%)の結果をもとに総合的に判断した。

3) 評価と課題

(1) 文型・語彙導入

- ・ 1コマで1課を導入するので、学期末には文法項目が多くて大変な課もあった。しかしながら、余裕を持って授業計画を立てていたため、特に問題はなかった。
 - ・ 今回は学生がみな優秀で、能力差がほとんどなかったため、進めやすかった。
- (2) 文字習得
- ・ 5名全員が既習であった。授業開始前のひらがなテスト(清音43文字)でも全員正答率90%以上。カタカナテスト(清音43文字)も同様に全員正答率90%以上であった。
 - ・ 第3週から予定どおり、語彙・表現・文型の復習のためのディクテーションが実施できた。
 - ・ 長音(語中:趣味、語末:電話番号・勉強等)表記の不正確さが見られた。また、カタカナの定着が一般的に不完全で、カタカナ語(外来語)の表記はあまり満足できるものではなかった。引き続き、初中級でもディクテーションの実施が望まれる。
- (3) 学生の出席率と成績
- ・ 出席は非常に良好。欠席0は4名、欠席1回は1名。
 - ・ 授業態度、成績ともに優良。ただし、1名は性格によるためか、口頭練習で口ごもる場面が多かった。復習テストでは優秀な成績であったが、最終試験では正答率68%だったため、総合評価では良となった。そのほかは全員優。
- (4) アンケート調査
- ・ 5名とも授業には「非常に満足」と答えていた。(山中和樹)

3. 日本語初中級

- ・ 受講者: 4名(アメリカ2名、ドイツ1名、中国1名)
- ・ 授業時間: 4コマ/週 総コマ数: 53コマ
- ・ 担当教員: * 膽吹覚、酢谷尚子

1) 教科書及び授業の目標

- ・ 『みんなの日本語初級Ⅱ』(スリーエーネットワーク)
『みんなの日本語初級Ⅱ文法解説』(スリーエーネットワーク)
- ・ 初中級の日本語の文法、語彙を学び、応用練習をする。
- ・ 日本の社会生活、日常生活を理解し、コミュニケーションができるようになる。

2) 方法

(1) 授業方法

- ・ 文型の導入と定着に中心とした授業を行なった。具体的には語彙を導入した後で、練習A・B・Cを行った。そして、理解の困難な文型については、副教材の『書いておぼえる文型練習帳』を用いて、その理解と定着を図った。会話はこの授業では扱わなかったが、毎回1人ずつ1分間スピーチを担当させて、日本語の運用能力の向上を図った。宿題は教科書の「問題」をコピーして、それを課した。

(2) 小テスト

- ・ 26-30、31-35、36-40、41-45の4回実施した。

(2) 成績および評価

- ・ 3分の2以上の出席を前程として、期末試験（80%）とクイズ（20%）の結果をもとに授業態度などを考慮して総合的に判断した。

3) 評価と課題

- ・ 47課までしか進めなかったが、期末試験の結果を見る限り、受講生のほぼ全員が47課までの文型・語彙を確かに習得したと見てよいであろう。このクラスは非漢字圏からの学生が過半数を占めていたので、漢字の指導が必要であったが、時間の都合でそれが十分に果たせなかったことは、今後の課題として残る。(膽吹 覚)

4. 日本語中級（日本語B）

- ・ 受講者3名（アメリカ2名、中国1名）
- ・ 授業時間：1コマ/週 総コマ数：14コマ
- ・ 担当教員：山中和樹

1) 教科書及び授業の目標

- ・ 教科書：プリント（『日本語中級用 速読文化エピソード』より）
- ・ 速読により、内容把握ができるようにするとともに、文型・会話の練習を行い、コミュニケーション能力の向上を図る。

2) 方法

(1) 授業方法

1日に1～2課のペースで進行した。まず、黙読により内容把握をさせたあとで、音読により、学生の問題点（漢字の読み、発音等）をチェックした。その後、文法その他の重要項目の説明を行った後、練習問題や会話練習を行った。

(2) 評価方法

成績評価は規定の出席率を満たすことを前提として、期末試験の成績、授業態度などを考慮して、総合的に判断した。

3) 評価と課題

この授業は共通教育の「日本語B」との共同授業であり、学部学生との日本語力が懸念されたため、当初の計画の教科書を変更した。アンケートの結果、3名とも「おおいに満足」との回答が寄せられたが、当初の教科書の方がよかったとの回答も1名よりあった。

日本語能力は学部学生に劣るものではなく、むしろ優れていた。期末試験の結果からもそれが裏付けられる。出席状況もよく、授業態度もまじめで積極的であった。

教科書の変更により、ペース配分が難しく、課題や復習テストに時間を割けなかったが、今期の経験を次回に活かしていきたい。(山中和樹)

5. 日本語中級（日本語D）

- ・ 受講者：3名（アメリカ2名、中国1名）

- ・ 授業時間：1コマ/週 総コマ数：15コマ
 - ・ 担当教員：膽吹覚
- 1) 教科書及び授業の目標
- ・ 『大学・大学院 留学生の日本語①読解編』(アカデミック・ジャパニーズ)
 - ・ 専門分野のレポート・論文などの論理的な文章を読むための基礎的な読解技術を目標とする。
- 2) 方法
- (1) 授業方法
- ・ 教科書に従って、1コマで1課ずつすすめた。具体的には語彙の導入、本文の音読、文型の導入と練習、読解技術の導入と練習を行なった。また、毎回、教科書に付されている課題作文を宿題として課し、添削して論理的な作文の技能向上も図った。
- (2) 成績および評価
- ・ 3分の2以上の出席を前程として、期末試験の結果をもとに授業態度などを考慮して総合的に判断した。
- 3) 評価と課題
- 全体としては1冊の教科書を全課学習できたので、当初の授業の目標は凡そ達成されたと考えている。また、少人数であったので、丁寧に指導できたことはよかったと思う。 (膽吹 覚)

6. 日本事情 1

- ・ 受講者：3名(アメリカ2名、中国1名)
 - ・ 授業時間：1コマ/週 総コマ数：15コマ
 - ・ 担当教員：今尾ゆき子
- 1) 教科書及び授業の目標
- ・ 教材：ハンドアウト(『日本を知るーその暮らし365日ー』から抜粋)、プリント
DVD：「年中行事としきたり」、NHK録画ビデオ「ゆく年・くる年」など
 - ・ 目標：日本の社会構造や文化、日本人の考え方・価値観を学ぶとともに自国の文化や価値観を再認識する。
- 2) 方法
- (1) 授業方法
- ・ ハンドアウト、DVD、ビデオなどで年中行事やしきたりについて学び、日本人の考え方を知る。
 - ・ 見学授業：福井の歴史、風土、産業を学ぶ
 - ① 福井県立歴史博物館(11/10)：「福井の歴史」「昭和の暮らし」「龍」展(特別展)
 - ② 福井市立郷土歴史博物館(12/8)：(参勤交代衣装の着付け体験)および養浩館
 - ・ 体験授業
 - ① 俳句大会(12/22)：
俳句の成り立ちと形式を学んで各自6句の投句を課し、句会形式で合同発表。

- ② かるた大会（1／19）：「越前・若狭いろはかるた」（ふくい文化研究会作成）を使用。読み札の内容（福井の名所・名産等）を事前学習の後、牧島荘にて実施。畳の上で日本の伝統的な遊びを体験。

(2) 成績及び評価

レポート（見学・句作・かるた大会）：50%、期末試験：50%

3) 評価と課題

- ・ 出席および授業態度も良好。特に見学授業や俳句大会・かるた大会などのイベントに楽しんで参加し、レポート作成も真面目に取り組んだ。
- ・ 「日本事情1」は共通教育科目「日本事情B」との合同授業である。今回は「事情Bの受講生18名、「日本事情1」の受講生3名で、総勢21名の見学授業実施は物理的・時間的に厳しいものがあつた（参勤交代衣装の着付け体験は2組に分割、見学にもっと時間的余裕がほしいという意見あり）。見学授業では学内キャンパス便のバスを利用しているが、バスの定員（20名）等を考えると、受講者数はこれが限界である。（今尾ゆき子）

7. 多文化コミュニケーション1

- ・ 受講生：1名（中国1名）
- ・ 授業時間：1コマ／週 総コマ数：14コマ
- ・ 担当教員：山中和樹

1) 目標

日本人学生と留学生との対話や質疑応答を通じて、お互いの文化について理解し、異文化との交流方法の基礎を習得する。

2) 方法

- (1) この科目は共通教育科目「多文化コミュニケーションA」との合同授業である。授業はプリントやCDを利用した講義、及び学生の発表とから成る。学習内容は①人名のつけかた、②学生の出身国の国歌の紹介、③学生の出身国の祝祭日及び年中行事の紹介、④数に関すること（吉数、凶数等）であつた。

(2) 復習クイズ

復習クイズは実施していないが、①名前の付け方、②国歌の項目終了後、比較対照のレポートを課した。

(3) 成績及び評価

成績評価はセンター規定の出席率を満たすことを前提とした。その上で、中間レポート2種（①名前の付け方、②国歌）と最終レポート2種（③祝祭日及び年中行事、④数）の評価、出席率、授業態度等を考慮して、総合的に判断した。

3) 評価と課題

この授業は共通教育科目との共同授業であるので、毎回、学部学生の日本語能力との差が懸念されるところであるが、今回は同等、又はそれ以上の能力があつたので、何ら問題は発生しなかつた。

った。

パワーポイントの使用も考慮したが、学生とのふれあいを重視し、これまでどおりプリントを配布した。今期は授業の日に、教職員の健康診断日及び留学生の健康診断日が重なり、2回影響を被った。休講ではないが、時間をだいぶ取られた。そのため、健康診断の間中は日本人学生と留学生を小グループに分け、自己紹介をしあう時間を設けた。テーマを与えて討論させるには、留学生の日本語力はまだ十分とは言えない。自由に会話させてみたが、その後の発表では、趣味の領域以上のテーマには及ばなかったようである。(山中和樹)

8. 応用日本語 1

- ・ 受講生：2名（アメリカ2名）
- ・ 授業時間：1コマ/週 総コマ数14コマ
- ・ 担当教員：山中和樹

1) 教材及び授業の目標

- ・ 教材：テレビドラマ「僕の生きる道」全11話(各45分)
- ・ 最近の代表的なテレビドラマを通して、日本の社会、精神風土を理解すると同時に、微妙な気持ちの表現方法を学ぶ。また、教科書で学んだ日本語の応用形である、短縮形、短縮表現、音便等の理解運用力を養う。

2) 授業方法

まず、音声とともに画面を見て、ストーリーの概略を把握させる。次に、シナリオを配布して、理解内容、表現等を確認練習する。毎回、前回の内容及び自国との相違に関するレポートを提出させる。レポートは翌週、チェックした上で返却する。

3) 評価と課題

- ・ この科目は共通教育科目「応用日本語Ⅱ」との合同授業である。正規の学部生、特別聴講生（交換留学生）も参加するので、日本語力の差が懸念されたが、レポート、授業態度を見る限りでは、差は見られなかった。
- ・ 出席率、授業態度、毎回のレポート、期末試験より総合的に評価した。
- ・ 本ドラマは高視聴率を記録した人気ドラマで、学生にも好評であった。(山中和樹)

9. 伝統産業 1

- ・ 受講生：20名（中国9、アメリカ4、韓国3、フランス2、ドイツ1、インドネシア1）
- ・ 訪問見学回数：6回（1回の見学は授業3コマ相当）
- ・ 担当教員：中島清

1) 目標

伝統産業が地域や日本全体の産業技術の発展にどのように関わっているのか。家内工業から出発した伝統産業がグローバル化にどう対処しているのか。伝統産業を守り、発展させながら、次世代に技術継承するためにどのような課題があるのか。和紙の里、漆器会館、陶芸村など、伝統産

業の同業者組合と共同施設の役割はどのようなものなのか。そのような視点から、日本の現代産業の背景にある伝統産業を通して現代の日本社会の理解を深める。

2) 方法

福井の伝統工芸である、「越前焼」「越前和紙」「越前漆器」「越前打刃物」等の創作生産現場を6箇所訪問見学する。工房では伝統工芸の歴史、技術、研鑽、課題等について専門家(伝統工芸士)の話聞く。更に、研修施設での実習も行う。6回の訪問について毎回レポートを提出してもらい、理解の深まりを確認する。

3) 評価と課題

成績評価割合：レポート提出率 50% 出席率 50%

- ・ 生産現場を直接訪問し、伝統工芸士から話を聞くので、講義等では得がたい、深い理解と確かな知識が得られている。
- ・ 従来、バス片道1時間圏内だけでなく、若狭地方、加賀地方の伝統産業見学も行っていたが、2006年度より、見学先を福江市郊外に限定することになり、その結果、見学先数の確保が難しく、実質後期のみが開講となっている。
- ・ 参加者20名というのは、騒音を伴う工場等での説明で、声が届きにくいという難点があるが、前回よりトランシーバーを全員に持たせることによって全員が均等に説明を聞けるようになった。(中島清)

《むすび》

2009年前期は中国、韓国、タイ、ポーランド、シリア、ドイツの6カ国、後期は中国、韓国、アメリカ、フランス、ドイツ、インドネシアの6カ国からの留学生が短期留学プログラムの日本語・日本事情科目及び伝統産業科目を受講した。

2009年度後期、新規に受け入れた20名は、それぞれ日本語力に応じて「日本語初級」(13名)、「日本語初中級」(4名)、「日本語中級」(3名)を受講した。中級の学生は、日本語科目に加えて「日本事情1」(3名)、「多文化コミュニケーション1」(1名)、「応用日本語1」(2名)を受講した。また、20名全員が「伝統産業1」を受講した。(今尾ゆき子)

3. 全学向け日本語コース

1. 概要

本コースは本学で学ぶすべての留学生及び外国人研究者を対象として開設された日本語の補講コースである。本年度は例年通り前後期ともに日本語Ⅰ～Ⅳの4クラスを開講した。また、後期には日本語能力試験対策クラスを新設し、留学生の日本語能力の向上に努めた。

2. 開講科目と教科書

クラス	学期	教科書
日本語Ⅰ	前期・後期	みんなの日本語初級Ⅰ
日本語Ⅱ	前期・後期	みんなの日本語初級Ⅱ
日本語Ⅲ	前期・後期	新日本語の中級
日本語Ⅳ	前期	中級日本語文法要点整理ポイント20
	後期	日本語上級読解
日本語能力試験対策クラス（1級）	後期	プリント（過去問を中心に）
日本語能力試験対策クラス（2級）	後期	プリント（過去問を中心に）

3. プレースメントテスト

前期：2009年4月17日（金） 受験者数13名

後期：2009年10月16日（金） 受験者数24名

4. 継続受講者数

		日本語Ⅰ	日本語Ⅱ	日本語Ⅲ	日本語Ⅳ	合計
前期	登録可能数	9	12	11	14	46
	登録数	6	9	10	10	35
	登録率	67	75	91	71	76
後期	登録可能数	8	6	13	17	44
	登録数	2	5	10	10	27
	登録率	25	83	77	59	61

5. 授業報告

《前期》

① 日本語 I

- ・ 受講者：11名（ペルー1名、フランス1名、インドネシア1名、タイ1名、
バングラディシュ1名、中国 6名・・・1名は6月19日より受講）
- ・ 授業時間：5コマ/週 66コマ
- ・ 担当教員：澤崎幸江、斉藤ますみ、酢谷尚子、鶴町佳子、高瀬公子
- ・ コーディネーター：今尾ゆき子

1) 教科書及び授業の目標

- ・ 『みんなの日本語初級 I』『みんなの日本語初級 I 翻訳文法解説』各国版
(スリーエーネットワーク)
- ・ 初級の基本的な語彙と文法を習得するとともに、日本語で簡単なコミュニケーションができるようになる。

2) 授業方法

1 課を 2 コマで終えるペースで授業を進めた。練習 B で 1 日の学習量を決め、該当する練習 A と練習 C を同じ日に行うことにした。1 コマ目に新出語彙を導入し、2 コマ目は語彙の復習をして定着を図った。2 コマ目に会話とビデオを行った。復習はテキストの復習 A～E にあわせて 1 コマずつ、復習テスト・期末テストの前にも 1 コマずつ設けた。大切な学習項目である「て形」と「普通形」に対しても 1 コマずつ学習の日を設けた。

ひらがなは 7 コマで『ひらがな・カタカナれんしゅう』のひらがなの部分を終えて、ディクテーションテストをしてみた結果、長音・拗音などに問題のある学生があった。そこでプリントを使って特殊音を再学習した後、カタカナに進んだ。その後、カタカナ語を含む文章単位のディクテーションを毎日行った。

(1) 復習テスト・期末テスト

1～13 課、14～19 課、20～25 課をひとまとめにして、復習テストを 3 回行った。その結果に基づいて、習得が不十分と思われる箇所の指導を行った。

(2) 成績及び評価

成績評価はセンターの規定の出席率を満たすことを前提とし、復習テスト 5%、期末テスト 85%に換算して総合点で判断した。

2) 評価と課題

「て形」以降、さまざまな活用が導入されると、都合で週 3 回しか出席できないという事情があり、10 日近く帰国した学生はついてこられなくなり、出席状況が悪くなった。出席率を満たした 6 名のうち、期末テストを受けた学生は 5 名で、優 2 名、良 2 名、不可が 1 名だった。授業を熱心に受けた学生については、ほぼ授業目標が達成できたと考える。クラスの雰囲気はなごやかで、お互いに助け合う場面も見られた。合格者 4 名のうち、1 名は帰国予定だが、3 名は日本語 II のコースに進むことを希望している。
(高瀬公子)

② 日本語Ⅱ

- ・ 受講者：9名（中国6名、フィリピン、フランス、パキスタン、各1名）
- ・ 授業時間：5コマ/週 合計65コマ
- ・ 担当教員：齋藤ますみ、酢谷尚子、高瀬公子、鶴町よしこ
- ・ コーディネーター：桑原陽子

1) 教科書及び授業の目標

- ・ 教科書：『みんなの日本語Ⅱ』『みんなの日本語Ⅱ文法解説書』（スリーエーネットワーク）
- ・ 初級レベルの基本文法と語彙を習得し、日常生活において円滑なコミュニケーションができるようになることを目指す。

2) 方法

(1) 授業方法

学習範囲は『みんなの日本語Ⅱ』の26課から48課で、33課の文法項目の命令形を除き、1課を2回のペースで進めた。各課の導入項目を2回に分け、その日に導入した部分の練習を行った。理解と定着の様子を見て、会話練習まで発展させた。副教材は主に文型練習帳を使い、視聴覚教材として聴解タスクや会話ビデオも使用した。会話ビデオに関しては課終了時にほぼ毎回視聴した。2～3課毎に復習の日を設け口頭練習を中心に定着を図った。また、26～32課、33～40課、41～48課をひとまとめとして復習テストを行い、前日はテスト範囲の復習とした。

(2) 漢字学習

漢字学習は『みんなの日本語初級Ⅰ漢字』の漢字テキストをもとに、フラッシュカードを使って、1日に5～6字読めるようにすることを目標にほぼ毎日行なった。途中フラッシュカードでの復習を行い、コースの終盤ではユニットテストの形でプリントに書かせた。漢字の学習意欲を高めるために復習テスト、期末試験ともに10点程度の漢字の読みを出題した。これは前年度と同様に漢字圏、非漢字圏の学習者に提出問題を変えて出題した。

(3) 成績評価

成績評価はセンター規定の出席率を満たすことを前提とし、期末テスト85パーセント、復習テスト3回各5パーセントとして判定した。

3) 評価と課題

今期はコース登録をした9名全員が期末試験を受け、一名を除く8名が合格点に達した。内訳は優3名、良4名、可1名だった。授業中は皆まじめで、熱心に且つ協力的にクラス活動に参加していた。しかし専門の授業と時間が重なったり、多忙なため曜日によっては出席できない学生もいた。今後のクラス運営を考えると、申請の曜日だけの出席率と、試験の結果で上のレベルに進む学生について、何らかの検討が必要ではないかと思う。（齋藤ますみ）

③ 日本語Ⅲ

受講者：16名（中国13名、韓国1名、フランス1名、シリア1名）

授業時間：4コマ/週 合計53コマ

- ・ 担当教員：市村葉子、齋藤ますみ、*酢谷尚子
- ・ コーディネーター：膽吹覚

1) 教科書及び授業の目標

- ・ 教科書：『みんなの日本語Ⅱ』『みんなの日本語Ⅱ文法解説書』
『新日本語の中級』『新日本語の中級分冊』（スリーエーネットワーク）
- ・ 中級レベルの文法・聴解・会話・作文の4技能の定着を目指す。

2) 方法

(1) 授業

1週目に『みんなの日本語Ⅱ』49課、50課で敬語を学習した。2週目から『新日本語の中級』11課～20課を、2日に1課のペースで進めた。1日目に語彙、文型、会話練習を行い、2日目に読解、活動（ロールプレイ等）、聴解を行った。

(2) 漢字・読解・聴解・作文

漢字は『みんなの日本語Ⅱ』の漢字テキストをもとに、毎回フラッシュカードを使って、1日に8～9字読めるようにした。2課毎に復習として漢字プリントを配布して読み方を書かせた。漢字の学習意欲を高めるために復習テスト、期末テストともに10点の漢字の読みを漢字圏と非漢字圏に分けて出題した。読解は初中級レベルの『読解をはじめるあなたへ』、聴解は『新毎日の聞き取り上・下』を使って13回行い、読解も聴解も解答するだけではなく、そのトピックについて意見を交換できるようにした。作文は『やさしい作文』を使って5回行い、そのテーマで使う表現を確認し、意見を交換し、作文を書いた。

(3) 成績評価

センター規定の出席率を満たすことを前提とし、復習テスト2回（15%）、期末試験（85%）の結果を基にして授業態度などを考慮して、総合的に判断した。

3) 評価と課題

9名が出席率を満たしており、そのうち期末試験を受けたのは7名で6名が合格。積極的に意見を言い、ペアで会話練習やロールプレイをすることができた。漢字は初級レベルだが、対になっている語と読み間違えたり、濁点や長音抜けてしまうミスが多かった。作文は自分の経験したことを早くまとめ、独創的なものが書けてよかった。読解や聴解は最近のことがトピックになっていたの、興味を持ち、意見は交換しやすかったが、読解の初級レベルの漢字には振り仮名がついていないものが多く、非漢字圏の学生にとっては読みにくかったようだ。日本語Ⅳと比べると、レベルの差があるので、今後は日本語Ⅳにスムーズに移行できるようなテキストを選び、文法・聴解・会話・作文・読解すべてにおいて、さらに応用力をつけていく必要がある。（酢谷尚子）

④ 日本語Ⅳ

- ・ 受講者：11名（中国11）
- ・ 授業時間：4コマ/週 総コマ数：53コマ
- ・ 担当教員：酢谷尚子、*村上洋子

- ・ コーディネーター：山中和樹

1) 教科書及び授業の目標

- ・ 中級日本語文法要点整理ポイント20 (スリーエーネットワーク)
語彙力ぐんぐん1日10分 (スリーエーネットワーク)
- ・ 中上級の文法の定着と語彙力、読解力を養うことで、さらなる日本語能力のレベルアップを目指す。

2) 方法

(1) 授業方法

- ・ メインテキストには「中級日本語文法要点整理ポイント20」を用いた。1課を2コマで終えるペースで進めた。また、毎時間授業開始の10分間で、「語彙力ぐんぐん1日10分」のテキストを用いて、語彙の定着を図った。今年度は7月にも日本語能力試験があり、受講者のうち、それぞれ3名ずつが2級と1級の試験を受験したので、テキストほかにも、能力試験の過去の問題を用いて、試験対策を行った。

(2) 成績および評価

期末テストの結果をもとに授業態度などを考慮して総合的に判断した。

3) 評価と課題

受講者11名でスタートした。授業やゼミの関係で、週4回出席できる学生は少なく、週2回の登録者が多かった。7月5日の日本語能力試験までは、出席者も多かったが、試験の後は、ゼミの発表などもあり、出席率が悪くなった。

今回のメインテキストは、中級の文法を理解させ、定着させるのに役に立ったと思われるが、どうしても文法中心となり、読解や作文の時間があまりとれなかったのが残念だった。期末テストの受験者は8名で、全員合格した。合格者の8名全員が、来期の日本語能力試験1級対策クラスの受講を希望している。

(村上洋子)

《後期》

① 日本語 I

- ・ 受講者：13名 (中国9名、バングラデシュ2名、フィリピン1名、タイ1名)
- ・ 授業時間：5コマ/週 62コマ
- ・ 担当教員：桑原陽子 (コーディネーター)、澤崎幸江、敷田紀子

1) 教科書及び授業の目標

- ・ 教科書『みんなの日本語初級 I』『みんなの日本語初級 I 文法解説書』
(スリーエーネットワーク)
- ・ 日本語で簡単な口頭でのコミュニケーションができるようになる。
- ・ 日本語のひらがな・カタカナの読み書きができるようになる。

2) 方法

(1) 授業方法

1 課をおよそ 2 日で終えるペースで学習した。副教材として、適宜聴解や文型練習プリント類を使用した。

(2) 復習クイズ

学生の習得度を確認するため、3 回の復習クイズを実施した。

(3) 成績及び評価

成績評価はセンター規定の出席率を満たすことを前提とし、復習クイズ 15%と期末試験 80%として評価した。

3) 評価と課題

- ・ 日本語研修コースとの合同授業について：今期から、日本語研修コース日本語（文型・文法）と合同で授業を行った。そのため、受講人数が多くきめ細かな指導が難しいことが問題視された。一方で、学生の国籍が多様で、話題が広がり活動に幅ができ非常に良かった。
- ・ かな補講について：プレイスメントテスト（PT）実施直後に、かなが未習の学習者には教材を配布し、早めの自習を指導したが、効果は見られなかった。PT実施後、授業開始まで日数がなかったためである。PT実施を1週間早め、かな補習クラスを開講できないだろうか。
- ・ 入門クラス開講について：日本語 I は、センター開講クラスの中で一番易しいレベルである。それよりもさらに易しく、文字学習を要求せず、場面中心で生活上の基礎的な会話を集中的に学ぶクラスを開講できないだろうか。理由は以下の2つである。文字学習が要求されるとクラスについてこれない学習者がいる。日本語 I が日本語 II につなげることを意識した文法積み上げクラスであり、簡単なコミュニケーションはできるが正確さを求められるテストで合格できない学習者がいる。予算や人員配置の問題があり容易ではないことは了解しているが、課題として挙げておく。（桑原陽子）

② 日本語 II

- ・ 受講者：10 名（ペルー 1 名、韓国 1 名、パキスタン 1 名、中国 7 名）
- ・ 授業時間：5 コマ/週 62 コマ
- ・ 担当教員：斎藤ますみ、酢谷尚子、*高瀬公子
- ・ コーディネータ：今尾ゆき子

1) 教科書及び授業の目標

- ・ 『みんなの日本語 II』『みんなの日本語 II 文法解説各国語版』（スリーエーネットワーク）
- ・ 初級レベルの基本文法と語彙を習得し、日常生活において円滑なコミュニケーションができるようになることを目指す。

2) 方法

(1) 授業方法

学習範囲は『みんなの日本語 II』の 26～48 課で、33 課の文法項目の命令形・禁止形を除き、1 課を 2 回のペースで行った。2～3 課ごとに復習の時間を設け学習項目の定着を図った。1

回の進め方としては、各課の導入項目を2回に分け、その日に導入した文法項目を基本練習から応用まで行った。副教材は主に『文型練習帳』を使い、各課2コマ目にはビデオを視聴した。

また、基本的な漢字が読めるようにするため、『みんなの日本語初級Ⅰ漢字英語版』の漢字を1日5～6字フラッシュカードで読む練習をし、2ユニット毎にプリントで復習させた。

(2) 復習テスト・期末テスト

26～33課、34～41課、42～48課をひとまとめとして、復習テストを3回行った。期末テストの範囲は26～48課とした。漢字の学習意欲を高めるために復習テスト、期末テスト共に10点程度漢字の読みを出題した。漢字圏と非漢字圏の不公平感を避けるため、漢字圏は読みを書かせる問題、非漢字圏は読みの4択問題とし、配点には含まず100点+10点のように表示した。

(3) 成績及び評価

成績評価はセンターの規定の出席率を満たすことを前提とし、復習テストは各5%、期末テストは85%に換算して総合点で判断した。

3) 評価と課題

登録した10名のうち3名が2～3週目に、1名が学期半ばに来なくなった。出席率を満たした6名は期末テストを受け全員が合格点に達した。内訳は優が3名、良が1名、可が2名だった。授業中は皆まじめで、熱心且つ協力的にクラス活動に参加していた。日本語Ⅱは学習項目が多いため、2～3課毎に復習を取り入れ、定着を図る努力をした。しかし専門の授業と時間が重なり、週3回しか出席できないなどという事情がある場合は申請の曜日の出席率を満たしていても未消化の学習項目を抱えていることが成績から伺われる。(高瀬公子)

③ 日本語Ⅲ

- ・ 受講者：12名（中国9名、フランス1名、フィリピン1名、シリア1名）
- ・ 授業時間：4コマ/週 50コマ
- ・ 担当教員：*齋藤ますみ、市村葉子、酢谷尚子、鶴町佳子
- ・ コーディネーター：膽吹覚

1) 教科書及び授業の目標

- ・ 教科書：『新日本語の中級』（1課～10課）（スリーエーネットワーク）
『みんなの日本語 初級Ⅱ』（49課、50課）（スリーエーネットワーク）
- ・ 中級レベルの口頭能力、及び聴解、読解、作文の四技能の向上をはかる。

2) 方法

(1) 授業方法

1週目に『みんなの日本語 初級Ⅱ』49、50課を行い、2週目から『新日本語の中級』に入った。『新日本語の中級』は1課を3回ですることとし、10課まで終了した。期間中、教科書以外に計8回の読解、聴解、作文を中心とした授業をした。それぞれ副教材として『げんきⅠ、Ⅱ』（The Japan Times）、『新毎日の聞き取り（中級）』（凡人社）を使用した。作文など時間内に終わらなかった課題は宿題とし、後日提出させた。

漢字の学習は『みんなの日本語 初級Ⅱ 漢字練習帳』からフラッシュカードで導入、確認し2課毎にプリントで復習をした。

(2) 復習テスト

復習テストを2回実施した。

(3) 成績及び評価

成績評価はセンター規定の出席率を満たすことを前提とし、その上で期末試験の結果を基にして授業態度などを考慮して、総合的に判断した。

3) 評価と課題

12名の受講生のうち、他の授業やゼミの関係で毎日受講可能な学生は1人しかいなかった。しかし全体的に学生は授業に意欲的で積極的に発話し、終始和やかな雰囲気でクラス活動が進められた。結果、規定の出席日数を満たした6名が期末試験を受験し、優3名、良2名、可1名の成績で、受験者全員が合格した。

コース終了時に行われた反省会では、小テストの漢字の出題方法について問題視する意見が出た。漢字圏学習者と非漢字圏学習者の漢字の出題方法が違うため、得点に差が出やすく、不公平ではないかというものだった。検討の結果、両者とも出題方法を同じ選択方式にすることを次年度への申し送りとした。
(齋藤ますみ)

④ 日本語Ⅳ

- ・ 受講者：12名（中国10名、韓国1名、カンボジア1名）
- ・ 授業時間：4コマ/週 50コマ
- ・ 担当教員：*鶴町佳子、齋藤ますみ、高瀬公子、村上洋子
- ・ コーディネーター：山中和樹

1) 教科書及び授業の目標

- ・ 教科書：『日本語上級読解…30の素材から見えてくる日本人の「いま」…』（アルク）
- ・ 中上級の読解力、語彙力を養うとともに日本人と日本文化への理解を深める。

2) 方法

(1) 授業方法

上記のテキストを使って、話題の導入、キーワード確認、読解、内容確認問題、語彙問題を行い、適宜内容について話し合いを行った。基本的に1課1コマ完結の授業としたが、テキスト後半で読解文が長いものについては、2コマで1課のペースで進めた。このほか、テキストから独立した「活動」を9回設け、ビデオ視聴、会話練習、作文練習等を行った。小テスト等は行わなかった。

(2) 成績及び評価

成績評価はセンター規定の出席率を満たすことを前提とし、その上で期末試験の結果を基にして授業態度などを考慮して、総合的に判断した。

3) 評価と課題

このコースの学生は特定の曜日しか出席できないという学生がほとんどであるため、各回完結の教材はこのコースに合っていたと思われる。しかし、このような工夫をしても学生は次第に欠席しがちになり、最終試験を受験、合格したのは2名のみであった。このコースは合格しても次に進むコースがなく、勉強を続けたい学生は合格しても再度このコースを受講することになる。こうした事情も、学生の受講継続に対する意欲を失わせる要因であろう。このような構造的な問題は解決が難しいが、登録した学生が最後まで受講を継続するよう、授業運営においてさらなる工夫を試みたい。(鶴町佳子)

⑤ 日本語能力試験1級対策クラス

- ・ 受講者：10名(中国9、カンボジア1)
- ・ 授業時間：1コマ/週 総コマ数：18コマ
- ・ 担当教員：村上洋子
- ・ コーディネーター：膽吹覚

1) 教科書及び授業の目標

- ・ 日本語能力試験1級過去問題
プリント
- ・ 日本語能力試験1級の合格を目指し、その為の語彙力、文法力、聴解力、読解力を養う。

2) 方法

(1) 授業方法

特定の教科書は用いず、文字語彙、文法、聴解、読解と4つの分野を過去の問題を中心に、解説しながら授業を行った。9月の初めから、夏休み中は週2コマ、

後期が始まってからは週1コマで12月の試験日を目標に授業を進めた。今期初めてできたコースなので、手探りで始めたが、学生の出席率もよく、やる気のある学生が多かったので授業はやりやすかった。

(2) 成績および評価

コースとしての評価はしていないが、能力試験の結果をコピーして提出する事が義務付けられている。

3) 評価と課題

試験の結果は、6名が合格、4名が不合格であった。9月から授業を始めたものの、帰国していて、出席できない学生や、前回(7月)の試験の結果が9月中旬にわかり、その結果によって、新たに出席を決めた学生、出席を見合わせる事になった学生もいて、出席者が確定したのは10月になってからだった。しかし、夏休み中に授業ができたのは忙しい院生には良かったと思われる。クラスの受講者は必ず12月の試験を受験することになっていたのも、みんな同じ目標に向けて一生懸命頑張っていた。ただ、文字語彙も、文法も覚える項目が非常に多く、授業時間が足りなかったという意見が多かった。直前に実際の試験と同じように模擬試験を行うとより効果的だと思う。(村上洋子)

⑥ 日本語能力試験 2 級対策クラス

- ・ 受講者：7名（中国5名、フランス1名、キューバ1名）
- ・ 授業時間：1～2／週 18コマ（9月～12月初旬）
- ・ 担当教員：鶴町佳子
- ・ コーディネーター：膽吹覚

1) 教材（以下のものより抜粋）

- ・ 『日本語能力試験 1・2級 試験問題と解答』2006年度、2008年度（凡人社）
- ・ 『日本語総まとめ問題集 新基準対応 2級 文法編』（アスク出版）
- ・ 『パターン別 日本語能力試験 2級 徹底ドリル』（アルク）
- ・ 『徹底分析 日本語能力試験 文字・語彙 2級』（国書刊行会）
- ・ 『完全マスター漢字 日本語能力試験 2級レベル』（スリーエーネットワーク）

2) 授業方法

最初に過去問題 1 回分を解かせ、現在の自分の能力および得意／不得意分野について認識させた。その上で、クラスで指導しきれない漢字、読解、聴解については、参考書・問題集を紹介したり、解答の技術を紹介したりして勉強の仕方を示し、その後は独習することとした。すべての基礎となる語彙、文法については、教師の解説が必要と考え、毎回語彙問題と文法問題を予習させ、クラスで質問を受け付けた上でチェックテストを行うというように進めた。文法については出題基準にあるものをほぼ網羅した。試験直前の 3 週間には最新の過去問題を解き、形式の最終確認および伸びの確認を行った。

3) 評価と課題

学生の予習を前提として進めたが、学生たちは学会等の用がない限りよく予習し、理解できないことについて活発に質問をしてきた。今回の学生についてはこの進め方で合っていたと考える。また、開講時期として、試験前 3 ヶ月という時期は妥当だと考える。準備期間として 3 ヶ月あれば、努力次第で 10%程度であれば点を伸ばすことも可能である。夏休みの 9 月に集中的に時間を確保したのもよかった。

結果は、4 名が合格、3 名が不合格だった。不合格の 3 名は、最初の過去問題を解いた時点で 20%近く点が足りず、かなりの努力が必要と判断されたが、特に研究が忙しい学生たちで、合格点に達するほど学習に時間が割けなかったようである。

福井大学留学生センターには貸し出し用の問題集や過去問題が多数あるが、この環境はやる気のある学生にとって役に立ったようである。合格した学生のほとんどはこの貸し出しをよく利用していた。
(鶴町佳子)

6. むすび

今年度はレギュラーの科目に加えて、新たに日本語能力試験対策クラスを新設することができた。このクラスは従来から検討されていたが、運営資金並びに担当講師が確保されたので、新設の運びとなった。2010 年度からこのクラスは、日本語能力試験対策講座と改称され、本学の中期

計画の中に組み込まれるかたちで運営される予定である。日本での就職を希望する留学生は今後とも増加すると想定されるので、今後も日本語能力試験を受験する留学生は増える傾向にあるとみている。次年度は本年度の試行錯誤を活かして、よりより対策講座となるように努める必要があると考えている。

(膽吹覚)

4. 共通教育科目・日本語日本事情科目

《概要》

2009 年度、センター教員はセンター開講科目以外に、共通教育センターが開講する基礎教育科目・外国語科目 8 科目、並びに教養教育副専攻科目・日中言語文化系及び日本語日本文化系科目 7 科目、の計 15 科目を担当した。

<日本語 A>

【受講生】 9 名（正規生 7 名、非正規生 2 名）

【目 標】 レポートの書き方を学ぶ

【教 材】 佐々木瑞枝・細井和代・藤尾喜代子著「中・上級者用日本語テキスト 大学で学ぶための日本語ライティング」The Japan Times

【方 法】

教科書に沿って、レポート執筆に必要な表現や文型を学ぶ。ほぼ毎回、練習問題やレポート執筆（2 回）の課題を出した。

筆記試験（60 点）と提出物・授業態度（40 点）を総合的に評価した。

【評価と課題】

- ・ 授業態度は非常に良好で、ほぼ全員が課題レポートにまじめに取り組んだ。
- ・ 初級文法が定着していないところがあり、毎回の課題で注意が必要であった。単調な文型練習ではなく、実際に学習者の書きたいものを書かせる中で、必要な文型の定着を図ることが必要であると痛感した。

非漢字圏学習者の中には、ワープロによる文書作成がまだ十分に出来ない者がおり、今後、ワープロによる課題提出も増やしていく必要を感じた。（桑原陽子）

<日本語 B>

【受講生】 16 名（正規生 11 名、非正規生 5 名）

【目 標】 速読により、内容把握ができるようにするとともに、文型・会話の練習を行い、コミュニケーション能力の向上を図る。

【教 材】 プリント（『日本語中級用 速読文化エピソード』より）

【方 法】

1 日に 1～2 課のペースで進化した。まず、黙読により内容把握をさせたあとで、音読により、学生の問題点（漢字の読み、発音等）をチェックした。その後、文法その他の重要項目の説明を行った後、練習問題や会話練習を行った。

【評価と課題】

- ・ この授業は短期プログラムの「日本語中級」との共同授業であり、短期プログラムの学生との日本語力が懸念されたため、当初の計画の教科書を変更した。

- ・ おおむね出席状況もよく、授業態度もまじめであった。
- ・ 教科書の変更により、ペース配分が難しく、課題や復習テストに時間を割けなかったが、今期の経験を次回に生かしていきたい。(山中和樹)

<日本語C>

【受講生】 8名 (学部生6名、交換留学生2名)

【目標】

- ・ 擬音語・擬態語や助詞の使い分けなどに関するテーマの文章を読んで初級のまとめをし、それらを実際の作文で使用できるようにする。

【教材】 プリント教材

【方法】

- ・ 大体、2コマに1課のペースでプリント教材を読み、語句の意味や用法の確認をおこなった。
- ・ 成績評価：中間試験 (30%)、期末試験 (70%)

【評価と課題】

- ・ 特別聴講生と短プロの学生は出席・授業態度とも良好 (3名とも 100%) だったが、学部生6名中2名は出席率が2/3を満たさず、受験資格が発生しなかった。他の4名中2名は100%、その他の2名は80%以上の出席率だった。学習意欲も特別聴講生や短プロの学生と比べると劣っていた。
- ・ マレーシアの学生を除く全員が中国人で、読解には特に問題はなかった。マレーシアの学生も漢字の読みにはさほど問題はなかった。
- ・ プリント教材は雑誌に掲載された記事を使用した。ふりがながついていなかったが、専門用語を除くと、理解が困難な様子はなかった。(山中和樹)

<日本語D>

【受講生】 5名 (工学部2名、交換留学生3名)

【目標】 専門分野のレポート・論文などの論理的な文章を読むための基礎的な読解技術为目标とする。

【教材】 『大学・大学院 留学生の日本語①読解編』(アカデミック・ジャパンーズ)

【方法】

- ・ 教科書に従って、1コマで1課ずつすすめた。具体的には語彙の導入、本文の音読、文型の導入と練習、読解技術の導入と練習を行なった。また、毎回、教科書に付されている課題作文を宿題として課し、添削して論理的な作文の技能向上も図った。
- ・ 3分の2以上の出席を前程として、期末試験の結果をもとに授業態度などを考慮して総合的に判断した。

【評価と課題】

- ・ 全体としては1冊の教科書を全課学習できたので、当初の授業の目標は凡そ達成されたと考

えている。また、少人数であったので、丁寧に指導できたことはよかったと思う。（膽吹覚）

<日本語E>

【受講生】23名（工学部14名、教育地域科学部1名、日研生1名、短期留学生〔B〕7名）

【目標】大学での講義、日常生活などで役に立つ実的な会話能力を養う。

【教材】『なめらか日本語会話』（アルク）

【方法】

- ・ 教科書に従って、1コマで2課ずつすすめた。「用例」では発音の練習を行い、それを踏まえて「練習」で応用力を養った。また、課ごとにリスニングが2問設けられているので、リスニング能力の向上も図った。
- ・ 3分の2以上の出席を前程として、中間試験と期末試験の結果をもとに授業態度などを考慮して総合的に判断した。

【評価と課題】

- ・ 全体としては1冊の教科書を全課学習できたので、当初の授業の目標は凡そ達成されたと考えている。ただし、短プロ科目との合同授業（計25名）であったために、発音練習が十分にできなかったこと、教科書が会話特有の語法の基礎定着を目指すものであったので、ロールプレイなどのアクティビティーを設けることができなかったこと、工学部生と短期留学生の日本語能力の格差（短期留学生の方が高い）など、反省或は工夫を要する点もあり、今後の課題も残されている。（膽吹覚）

<日本語F>

【受講生】8名（正規生3名、非正規生5名）

【目標】新聞記事・新書から時事問題を取り上げ、関連語彙・表現を学び効率よく読む技術を身につける。特に、予測して読む力をつけることを重視する。

【教材】新聞記事等の生教材

【方法】

- ・ 新聞記事・新書を素材として使用し、具体的な読みの技術を提示して読む練習を行った。必要に応じてピアラーニングを行い、回答の是非についてはクラス内で議論を行った。読解記事の要約、書き換え等の課題を課し、書く訓練を行った。
- ・ レポート課題（各10点 自由提出・最大13回）のうち得点の高い10回分を評価対象とした。

【評価と課題】

授業態度は大変良好であった。日本語力の高い学生が多かったため、要求の高い課題を出したが、どの学生もまじめに取り組んでいた。（桑原陽子）

<日本語G>

【受講生】11名（学部生4名、交換留学生6名、日研生1名）

【目標】

- ・ さまざまなテーマの文章を読んで要約することにより、語彙力を増やすとともに読解力および文章作成力を培う。

【教材】 柿倉侑子他『日本語上級読解』（アルク）

【方法】

- ・ 1授業1課のペースで課題文を読み、語句の意味の確認、文章構成・内容の把握を行った。
- ・ 毎回、テキストの課題文から選定した重要語句を用いた短文作成5題、要約文(160字程度)および感想・経験等の文章作成(160字)を宿題として課し、添削後返却した。
- ・ 成績評価：出席・宿題提出(50%)、期末試験(50%)

【評価と課題】

- ・ 出席・授業態度は良好(7名が100%、他の学生も80%以上の出席率)。
- ・ 学部生4名に対して非正規学生9名(交換留学生6名、日研生1名、短期プログラム生2名)で、国籍は5カ国(中国6名、韓国1名、ベトナム2名、マレーシア1名、ドイツ3名)。所属、国籍、日本語力の点からも多様な授業となった。このクラスは中国、韓国の学生をはじめ1級合格者が半数を占め、テキストの読解には困難がなかったが、短文作成、要約文などにおいて当初は不適切な表現が多く観察された。しかし、毎回の宿題を通じて誤用が少なくなり、文章量も多くなった。
- ・ テキスト(課題文)のレベルを低めに設定したため、1級レベルの学生にとっては「楽な授業」、非漢字圏の学生(ドイツ、ベトナム)にとってはかなり大変な授業となった。

(今尾ゆき子)

<日本語H>

【受講生】 9名(学部生3名、交換留学生6名)

【目標】

- ・ さまざまなテーマの文章を読んで要約して感想文を作成することにより、語彙力を増やすとともに読解力および文章作成力を培う。

【教材】 柿倉侑子他『日本語上級読解』（アルク）

宮原彬『留学生のための時代を読み解く上級日本語』（スリーエーネットワーク）

【方法】

- ・ 1授業1課のペースで課題文を読み、語句の意味の確認、文章構成・内容の把握を行う。
- ・ 毎回、テキストの課題文から選定した重要語句を用いた短文作成5題、要約文(160字程度)および感想・経験等の文章作成(160字)を宿題として課し、添削後返却した。
- ・ 成績評価：出席・宿題提出(50%)、期末試験(50%)

【評価と課題】

- ・ 出席・授業態度は良好(9名中8名が皆出席、1回欠席1名)。
- ・ 学部生3名(中国1名、ベトナム2名)に対して非正規学生(交換留学生：全員中国)6名の

構成。日本語力の高い交換留学生在が正規学生をリードする形の授業となった。このクラスは中国の交換留学生をはじめ1級合格者が可過半数を占め、テキストの読解には困難がなかったが、短文作成、要約文などにおいて不適切な表現が多く観察された。しかし、毎回の添削を通じて誤用が少なくなり、文章量も多くなった。(今尾ゆき子)

<日本事情A>

【受講生】27名（工学部15名、教育地域科学部1名、日研生1名、短期留学生〔B〕10名）

【目標】福井県の各市町村に関する現状を考究することによって、現代日本事情に関する知識を醸成し、理解を深める。

【教材】教科書は使用しなかった。

【方法】

- ・ 受講生が2人1組となって、福井県下の市町村から1つを選出し、その地域の産業・地理・歴史・観光などについて、パワーポイントを使用して、日本語でプレゼンテーション（20分）する。その後、教員並びに受講生とのディスカッションで理解を深め、その後、必要に応じて教員が補足説明を行った。
- ・ 3分の2以上の出席を前程として、プレゼンテーションとレポートの結果をもとに授業態度などを考慮して総合的に判断した。

【評価と課題】

- ・ 今年から学生参加型の授業を試みた。学生に20分間のプレゼンテーションを課したことは大きな不安であったが、ほぼすべての学生が十分な準備をして発表に臨んだことは評価できる。ただし、発表後のディスカッションは発言が毎回、一部の学生に偏り、まったく発言しない学生もいたことは今後の課題である。また、合同授業という点では、工学部生と短期留学生の日本語能力並びに授業に望む姿勢の格差（ともに短期留学生の方が高い）がはっきりしており、クラスを分けることも考えたが、これは今後の推移を見守りたい。(膽吹覚)

<日本事情B>

【受講生】18名（学部生15名、交換留學生3名）

【目標】日本の社会構造や文化、日本人の考え方・価値観を学ぶとともに自国の文化や価値観を再認識する。

【教材】ハンドアウト（『日本を知る—その暮らし365日—』から抜粋）、プリント
DVD：「年中行事としきたり」、NHK録画ビデオ「ゆく年・くる年」など

【方法】

- ・ ハンドアウト、ビデオ等で年中行事やしきたりについて学び、日本人の考え方を知る。
- ・ 見学授業（福井市立郷土歴史博物館、養浩館、福井県立歴史博物館）を行い福井の歴史、風土、産業について学んだ。
- ・ 俳句の成り立ちと形式を学んで各自6句の投句を課し、句会形式で合同評価した。

- ・ かるた大会（ふくい文化研究会作成「越前・若狭いろはかるた」使用）を牧島荘にて実施。読み札の内容（福井の名所・名産等）を事前学習の後、畳の上で日本の伝統的な遊びを体験。
- ・ 成績及び評価
レポート（見学・句作・かるた大会）：40%、期末試験：50%、出席点：10%

【評価と課題】

- ・ 学生の授業態度は熱心で出席率も良好。特に見学授業や俳句大会・かるた大会など参加型の授業を楽しみ、レポート作成も真面目に取り組んだ。
- ・ 「日本事情1」の受講者3名を合わせて総数21名と多数であったことから、見学授業の実施は物理的・時間的に厳しいものがあつた（着付け体験の衣装数が不足したため、博物館見学授業を2組に分割）。学内キャンパス便のバスを利用する見学授業は、バスの定員（20名）等を考えると、これが限界である。（今尾ゆき子）

<日本の文化>

【受講生】20名（工学部15名、日研生1名、短期留学生[B]4名）

【目 標】日本の伝統的な遊戯について学ぶことで、その背景にある日本文化、日本人の心性について考える。

【教 材】教科書は使用しなかった。

【方 法】

- ・ 日本の伝統的遊戯—しりとり、折り紙、いろはカルタ、百人一首、将棋、囲碁、福笑いなど—を取り上げて、教員がその歴史、遊び方、そこに見られる文化的特徴などについてパワーポイントを使って講義したあと、受講生が実際にその遊戯を体験し、教員と学生のディスカッションを経て、最後には課題（主にその遊戯についての意見）を課し、作文を提出させた。
- ・ 3分の2以上の出席を前程として、レポートの結果をもとに授業態度などを考慮して総合的に判断した。

【評価と課題】

- ・ 今年から学生参加型の授業を試みた。学生に実際に遊戯を体験させることで、授業への意欲を高める目論見は成功したが、その後の文化論への展開が不十分であったと思われる。また、この授業でも学部生と短期留学生の間での、日本語能力、授業への取り組み方、発言の多少、課題の解答、などすべての点で学部生が低く、短期留学生が高いという傾向が見られた。こうした傾向は他の合同クラスでも見られており、短期留学生の悪影響も考えられるので、今後はクラスの分離も視野に入れる必要があるであろう。（膽吹覚）

<多文化コミュニケーションA・異文化コミュニケーションA>

【受講生】43名（正規生34名、非正規生9名）

【目 標】日本人学生と留学生との対話や質疑応答を通じて、お互いの文化について理解し、異文化との交流方法の基礎を習得する。

【教材】教科書は指定しない。ハンドアウトを配布する。CDも活用する。

【方法】

- ・ 各国の学生にそれぞれの国歌、祝祭日、年中行事、数、伝統的な遊び、名前のつけ方等を紹介してもらって、質問する。日本に関するものや学生の出身国以外のは教員がハンドアウトを用意し、それについて質疑応答する。
- ・ ①名前のつけ方、②国歌、③祝祭日及び年中行事、④伝統的な遊び・ゲーム)についてのレポートを項目が終わるごとに提出させた。
- ・ 成績評価は出席、授業態度、レポート等を総合して行った。

【評価と課題】

- ・ パワーポイントの使用も考慮したが、学生とのふれあいを重視し、これまでどおりプリントを配布した。
- ・ 今期は授業の日に、教職員の健康診断日及び留学生の健康診断日が重なり、2回影響を被った。休講ではないが、時間をだいぶ取られた。そのため、健康診断の間中は日本人学生と留学生を小グループに分け、自己紹介をしあう時間を設けた。テーマを与えて討論させるには、留学生の日本語力はまだ十分とは言えない。自由に会話させてみたが、その後の発表では、趣味の領域以上のテーマには及ばなかったようである。(山中和樹)

<多文化コミュニケーションC・異文化コミュニケーションC>

【受講生】34名(日本15名、中国13名、ベトナム3名、マレーシア2名、ペルー1名)

【目標】日本人学生と留学生との対話や質疑応答を通じて、お互いの文化について理解し、異文化との交流方法の基礎を習得する。

【教材】教科書は指定しない。ハンドアウトを配布する。CDも活用する。

【方法】

- ・ 各国の学生にそれぞれの国歌、祝祭日、年中行事、数、伝統的な遊び、名前のつけ方等を紹介してもらって、質問する。日本に関するものや学生の出身国以外のは教員がハンドアウトを用意し、それについて質疑応答する。
- ・ ①名前のつけ方、②国歌、③祝祭日及び年中行事、④数(数え方、吉数、凶数等)についてのレポートを項目が終わるごとに提出させた。
- ・ 成績評価は出席、授業態度、レポート等を総合して行った。

成績評価は規定の出席率を満たすことを前提とした。その上で、①自己紹介、名前のつけ方、③国旗・国歌の中間レポートと、期末レポート(学生の出身国の祝祭日及び年中行事と日本やその他の国のものとの比較・考察について)、出席率、授業態度等を考慮して、総合的に判断した。

【評価と課題】

教室が改装され、以前より明るい雰囲気です。授業が行えた。また、資料として使うCDや、プリント類もいっそう充実してきている。特に、名前のつけ方や、中国の神々、葬儀に関する資料が増えたため、それらに割く時間が多くなり、各国の伝統的な遊びに触れる時間がなくなっ

た。時間配分を今後の課題としたい。

(山中和樹)

<応用日本語Ⅰ>

【受講生】21名(学部生15名、非正規生6名)

【目標】日本経済新聞掲載「仕事常識」を通して、日本企業における職場マナーを学ぶ。また、それを通して、現代日本の社会文化を理解する視点を養うとともに、語彙力、理解力、表現力の向上を図る。

【教材】日本経済新聞土曜版掲載シリーズ「仕事常識」のプリント

【方法】導入として、新聞記事の聴解を通して概略を把握する手法を実施した。導入後は教材の講読、内容質問等を行った。各回1つの記事を読み切り、次回にその内容に対する試験(記述試験)を実施した。試験については実施の次週に採点返却し、模範解答を配布した。

【評価と課題】

- ・ 成績評価は期末試験(電話応対試験)、出席率、毎回の試験を総合評価して行った。4名は出席が2/3以下だったため、受験資格を失った。その他の学生はおおむね出席は良好だった。授業態度も良好だったが、学習意欲は非正規生の方が上の印象を得た。
- ・ 資格外活動としてのアルバイトだけでなく、卒業後日本国内企業に就職する留学生の数が増えている。日本の企業文化、マナーを学ぶことにより、職場にスムーズに適応できるようさらに記事を厳選していく必要がある。

(山中和樹)

<応用日本語Ⅱ>

【受講生】22名(正規生14名、非正規生8名)

【目標】最近の代表的なテレビドラマを通して、日本の社会、精神風土を理解すると同時に、微妙な気持ちの表現方法を学ぶ。また、教科書で学んだ日本語の応用形である、短縮形、短縮表現、音便等の理解運用力を養う。

【教材】テレビドラマ「僕の生きる道」全11話(各45分)

【方法】まず、音声とともに画面を見て、ストーリーの概略を把握させる。次に、シナリオを配布して、理解内容、表現等を確認練習する。毎回、前回の内容及び自国との相違に関するレポートを提出させる。レポートは翌週、チェックした上で返却する。

【評価と課題】

- ・ 出席率、授業態度、毎回のレポート、期末試験より総合的に評価する。おおむね出席率は良好であったが、一部私語の目立つ学生がいたので、厳重に注意したところ、態度は改まった。
- ・ 本ドラマは高視聴率を記録した人気ドラマで、学生にも好評であった。
- ・ 本ドラマのストーリーはインターネットでも検索可能で、レポートに引用していた学生もいた。一部に不適切な引用もあったが、注意したところ、改まった。

(山中和樹)

《まとめ》

共通教育受講生と短期留学プログラム生との日本語力の差であった。中級レベルの日本語クラスでは概して非漢字圏の短期留学プログラム生の漢字能力が共通教育受講生に比べて低かったのが教材の選定や授業方法に考慮を要したクラスもあった。しかしながら、一般に短期留学プログラム生の方が共通教育受講生より学習意欲が高く、ハンディがあったにもかかわらず、努力の結果、共通教育受講生より良い成績を収めた。

(山中和樹)